

陽炎座

泉鏡花

青空文庫

「ここだ、この音なんだよ。」

帽子も靴も艶々^{あたま てらてら}と光る、三十ばかりの、しかるべき会社か銀行で当時若手の利^きけものといった風采^{ふうさい}。一ツ、容子^{ようす}は似つかわしく外国語で行こう、ヤングゼントルマンというのが、その同伴^{どうはん}の、――すらりとして派手に鮮麗^{あざやか}な中に、扱帯^{しごき}の結んだ端、羽織の裏、棲^{つま}はずれ、目立たないで、ちらちらと春風にちらめく処々^{ところどころ うつつ}に薄りと蔭がさす、何か、もの思^{おもい}か、悩^{なやみ}が身^みにありそうな、ぱつと咲いて浅く重る花片^{はなびら}に、曇のある趣^{くもり}に似たが、風情^{ふうせい}は勝る、花の香はその隈^{くま}から、幽^{かすか}に、行違^{ゆきちが}う人を誘うて時めく。薫^{かおり}を籠^こめて、藤、菖^あ蒲^{やめ}、色の調^{やめ}う一枚小袖^{こそで}、長襦袢^{ながじゆばん}。そのいづれも彩^{いろいと}糸は使わ^はないで、ひとえに浅みどりの柳の葉を、針で運んで縫ったように、姿を通して涼しさの靡^{なび}くと同時に、袖にも棲^{おんな}にもすらすらと寂しの添った、瘦^やせぎすな美しい女^{ひと}に、――今のを、ト言掛^{おん}けると、婦人^{おんな}は黙^{もく}って頷^{うなず}いた。

が、もう打領^{うし}く咽喉^{のど}の影^{かげ}が、半襟^{はんせき}の縫^{ぬい}の薄紅梅^{うすこうばい}に白く映^{うつ}る。……

あれ見よ。この美しい女は、その膚、その簪、その指環の玉も、とする端々透通つて色に出る、心の影がほのめくらしい。

「ここだ、この音なんだよ。」

婦人は同伴の男にそう言われて、時に頷いたが、傍でこれを見た松崎と云う、緋の羽織で、鳥打を被つた男も、共に心に頷いたのである。

「成程これだろう。」

但し、松崎は、男女、その二人の道ずれでも何でも無い。当日ただ一人で、亀井戸へ詣でた帰途であつた。

住居は本郷。

江東橋から電車に乗ろうと、水のぬるんだ、草萌の川通りを陽炎に纏れて来て、

長崎橋を入江町に掛る頃から、どこともなく、遠くで鳴物の音が聞えはじめた。

松崎は、橋の上に、欄干に凭れて、しばらく一人で聞入ったほどである。

ちゃんちきちき面白そうに囃すかと思うと、急に修羅太鼓を摺鉦交り、どどんじやじやんと鳴らす。亀井戸寄りの町中で、屋台に山形の段々染、鍛頭巾で、いろはを揃えた、義士が打入りの石版絵を張廻わして、よぼよぼの飴屋の爺様が、皺くたのまくり手で、

人寄せにその鉦太鼓かねたどを敲たたいていたのを、ちつと前さきに見た身にも、珍らしく響いて、気をそ
 そられ、胸が騒ぐ、ばったりまた激しいのが静まると、ツンツンテンレン、ツンツンテン
 レン、悠々とした糸が聞えて、……本所駅へ、がたくた引込ひっこむ、石炭を積んだ大八車の通
 るのさえ、馬士まごは銜煙管くわえぎせるで、しゃんしゃんと轡くつわが揺れそうな合方となる。

絶えず続いて、音色ねいろは替つても、囃子はやしは留まらず、行交ゆきかう船脚は水に流れ、蜘蛛手くもてに、
 角つぐむ蘆あしの根を潜くぐつて、消えるかとすれば、ふわふわと浮く。浮けば蝶の羽はの上になり下
 になり、陽炎かげろうに乗つて揺れながら近づいて、日当ひあたりの橋の暖い袂たもとにまつわつて、ちゃん
 ちき、などと浮かれながら、人の背中を、トンと一つ軽く叩いて、すいと退のいて、

——おいで、おいで——

と招いていそうで。

手に取れそうな近い音。

はつ、とその手を出すほどの心になると、橋むこうの、屋根を、ひよいひよいと手踊り
 雀、電信柱に下向きの傾かたがり燕、一羽気まぐれに浮いた鷗かもめが、どこかの手飼いの鶯うぐいす交りに、
 音を捕ひとうる人ひと心を、はツと同音に笑いでもする氣勢けはい。

春たけて、日遅く、本所は塵ちりの上に、水に浮うかんだ島かとばかり、都を離しずれて静かであつた。

屋根の埃も紫雲英の紅、朧のような汽車が過ぎる。
その響きにも消えなかつた。

二

松崎は、——汽車の轟きの下にも埋れず、何等か妨げ遮るものがあれば、音となく響きとなく、翩然と軽く体を躲わす、形のない、思いのままに勝手な音の湧出する、空を舞繞る鼓に翼あるものらしい、その打囃す鳴物が、——向って、斜違の角を広々と黒塀で取廻わした片隅に、低い樹立の松を洩れて、朱塗の堂の屋根が見える、稲荷様と聞いた、境内に、何か催しがある……その音であろうと思った。

けれども、欄干に乗出して、も一つ橋越しに透かして見ると、門は寢静つたように鎖してあつた。

いつの間にか、トチトチトン、のんきらしい響に乗って、駅と書いた本所停車場の建札も、駅と読んで、白日、菜の花を視むる心地。真赤な達磨が逆斛斗を打った、忙がい世の麵麴屋の看板さえ、遠い鎮守の鳥居めく、田圃道でも通る思いで、江東橋の停留

所に着く。

空いた電車が五台ばかり、燕が行抜けそうにがらんとしていた。

乗るわ、降りるわ、混合う人数の崩るるとき火水の戦場往來の兵には、余り透いて、相撲最中の回向院が野原にでもなったような電車の体に、いささか拍子抜けの形で、お望み次第のどれにしよう、大分歩行き廻った草臥も交って、松崎はトボンと立つ。

例の音は地の底から、草の蒸さるごとく、色に出で萌えて留まらぬ。

「狸囃子と云うんだよ、昔から本所の名物さ。」

「あら、嘘ばかり。」

ちようどそこに、美しい女と、その若紳士が居合わせて、こつ言を交わしたのを松崎は聞取った。

さては空音ではないらしい。

若紳士が言ったのは、例の、おいてけ堀、片葉の蘆、足洗い屋敷、埋蔵の溝、小豆婆、送り提燈とともに、土地の七不思議に数えられた、幻の音曲である。

言った方も戯に、聞く女も串戯らしく打消したが、松崎は、かえって、うっかりしていた伝説を、夢のように思出した。

興ある事かな。

日は永し。

今宮辺の堂宮の絵馬を見て暮したという、隙な医師と一般、仕事に悩んで持余した身体なり、電車はいつでも乗れる。

となると、家へ帰るにはまだ早い。……どうやら、橋の上で聞いたよりは、ここへ来ると、同じの無い中にも、囃子の音が、間近に、判然したらしく思われる。一つは、その声の響くのは、自分ばかりでない事を確めたせいであろう。

その上、世を避けた仙人が碁を打つ響きでもなく、薄隠れの女郎花に露の音信る声でもない……音色こそ違うが、見世ものの囃子と同じく、気をそそって人を寄せる、鳴ものらしく思うから、傾く耳の誘われる、寂しい横町へ電車を離れた。

向って日南の、背後は水で、思いがけず一本の菖蒲が町に咲いた、と見た。……その美しい女の影は、分れた背中にひやひやと染む。……

と、チャンチキ、チャンチキ、嘲けるがごとくに囃す。……

がらがらと鳴って、電車が出る。突如として、どどん、じゃん、じゃん。——ぶらぶら歩き出すと、ツンツンテンレン、ツンツンテンレン。

三

片側はどす黒い、水の淀んだ川に添い、がたがたと物置が並んで、米俵やら、筵やら、炭やら、薪やら、その中を蛇が這うように、ちよろちよると鼠が縫い行く。

あの鼠が太鼓をたたいて、鼈が笛を吹くのかと思つた。……人通り全然なし。

片側は、右のその物置に、ただ戸障子を繋合わせた小家続き。で、一二軒、八百屋、駄菓子屋の店は見えたが、鴉も居らなければ犬も居らぬ。縄暖簾も居酒屋めく米屋の店に、コトンと音をさせて鶏が一羽歩行していたが、通りかかった松崎を見ると、高らかに一声鳴いた。

太陽はたけなわに白い。

颯と、のんびりした雲から落かかつて、目に真蒼に映つた、物置の中の竹屋の竹さえ、茂つた山吹の葉に見えた。

町はそこから曲る。

と追分で路が替つて、木曾街道へ差掛る……左右戸毎の軒行燈。

ここにも、そこにも、ふらふらと、春の日を中へ取って、白く点したらしく、真昼浮出て朦と明るい。いずれも御泊り木賃宿。

で、どの家も、軒より、屋根より、これが身上、その昼行燈ばかりが目に着く。中には、廂先へ高々と燈籠のごとくに釣った、白看板の首を擡げて、屋台骨は地の上に獣のごとく這ったのさえある。

吉野、高橋、清川、槇葉。寝物語や、美濃、近江。ここにあわれを留めたのは屋号にされた遊女達。……ちよつと柳が一本あれば滅びた白昼の廓に斉しい。が、夜寒の代に焼尽して、塚のしるしの小松もあらず……荒寥として砂に人なき光景は、祭礼の夜に地震して、土の下に埋れた町の、壁の肉も、柱の血も、そのまま一落の白髑髏と化し果てたる趣あり。

絶壁の躑躅と見たは、崩れた壁に、ずたずたの襦袢のみ、猿曳が猿に着せるのであるう。

生命の搦む栈橋から、危く傾いた二階の廊下に、日も見ず、背後むきに鼠の布子の背を曲げた首の色の蒼い男を、フト一人見附けたが、軒に掛けた蜘蛛の囿の、ブトリと膨れた蜘蛛の腹より、人間は痩せていた。

ここに照る月、輝く日は、兀はげた金銀の雲に乗った、土御門家一流易道、と真赤まっかに目立
った看板の路地から糶出せりだした、そればかり。

空を見るさえ覗のぞくよう、軒行燈の白いにつけ、両側の屋根は薄暗い。

この春の日向ひなたの道さえ、寂さびれた町の形さえ、行燈に似て、しかもその白けた明あかりに映る

……

表に、御泊りとかいた字の、その影法師のように、町幅まちの真ただ中とも思う処に、曳棄ひきす
てたらしい荷車が一台、屋台を乗せてガタリとある。

近ちかづいて見ると、いや、荷の蔭に人が居た。

男か、女か。

と、見た体ていは、褪あせた尻切しりきりの茶の筒袖つつッぽを着て、袖を合わせて、手を拱こまぬき、紺きんの脚
絆穿んばき、草鞋掛わらしがけの細い脚を、車の裏へ、蹈揃ふみそろえて、衝つと伸ばした、抜衣紋ぬきえもんに手拭てぬぐい
を巻いたので、襟も隠れて見分けは附かぬ。編笠ひな、ひたりと折合ひもわせて、紐かぶを深く被かぶった
なりで、がつくりと俯向うつむいたは、どうやら坐眠いねむりをしていそう。

城の縄張りをした体ていに、車の轆えの中へ、きちんと入って、腰は床几しょうぎに落したのである。
飴屋あめやか、豆屋か、団子だんごを売るか、いずれにも荷が勝った……おでんを売るには乾いてい

る、その看板がおもしろい。……

四

屋台の正面を横に見せた、両方の柱を白木綿で巻立てたは寂しいが、左右へ渡して紅^{べにが}金巾^{なきん}をひらりと釣った、下に横長な掛行燈^{かけあんどん}。

一	坂東よせ鍋 ^{なべ}
一	おのえてんぶら
一	尾上天麩羅
一	大谷おそば
一	市川玉子焼
一	片岡 碗盛 ^{わんもり}
一	嵐 お萩
一	坂東あべ川
一	市村しる粉
一	沢村さしみ

一……………中村 洋食

初日出揃い役者役人車輪に相勤め申候

名の上へ、藤の花を末濃すてごの紫。口上あと余白の処に、赤い福面女おかめに、黄色な瓢箪男ひよつとこ、蒼い般若あおはんじやの可恐い面こわ。黒の松茸まつたけ、浅黄の蛤はまぐり、ちよつと蝶々もあしらつて、霞を薄くぼかしてある。

引寄せられて慕つて来た、囃子の音には、これだけ氣の合つたものは無い。が、松崎は読返してみても苦笑いした。

坂東あべ川、市村しるこ、渠かれはあまい名を春狐しゅんこと号して、福面女に、瓢箪男、般若の面、……二十五座の座附きで駈出しかけだの狂言方であつたから。――

「串戲じょうだん じやないぜ。」

思わず、声を出して独言ひとりごと。

「親仁さん、おう、親仁さん。」

なぞのもので、ここに木賃の国、行燈の町に、壁を抜出た楽がきのごとく、陽炎あられに踊あつて、我を諷ふうするがごとき浅黄あきの頭巾ずきんは？……

屋台の様子が、小児こどもを対手あいてで、新粉細工を売るらしい。片岡牛鍋、尾上天麩羅、そこへ

並べさせてみよう了りようけん簡。

「おい、お爺じいい。」

と閑ひまなあまりの言葉がたき。わざと中ちゆうッ腹に呼んでみたが、寂じやく 寞まくたる事、くろんぽ同然。

で、操あやつりの糸の切れたがごとく、手足を突張つっぱりながら、ぐたりと眠る……俗には船を漕こぐところと言え、これは筏いかだを流す体。

それに対して、そのまま松崎わかの分たもとった袂は、我ながら蝶が羽繕いをする心地であつた。まだ十歩と離れぬ。

その物売の、布子の円い背中なぞへ、同じ木賃宿のそこが歪ゆがみなりの角から、町幅を、一息、苗代形に幅の広くなつた処があつて、思いがけず臺いらかすたかの堆い屋形が一軒ななめ。斜に中空をさして鯉こいの鱗うろこの背を見るよう、電信柱に棟の霞んで聳そびえたのがある。

空屋か、知らず、窓も、門かども、皮をめくつた、面に斉ひとしく、大な節穴おおきが、二ツずつ、がツくり窪くぼんだ眼まなこを揃えて、骸骨がいこつを重ねたような。

が、月には尾花か、日向ひなたの若草、廂ひさしに伸びたも春めいて、町から中へ引込んだだけ、生ぬるいほどほかほかする。

四辺あたに似ない大構えの空屋に、——二間ばかりの船板塀ふないたべいが水のぬるんだ堰いせきに見えて、その前に、お玉杓子たまじやくしの推競おしくらで群る状さまに、大勢小児こどもが集たかっていた。

おけらの虫は、もじやもじやもじやと皆動揺どよめく。

その癖静まつて声を立てぬ。

直じきその物売の前に立ちながら、この小さな群集の混合つたのに気が附かなかったも道理こそ、松崎は身に染みた狂言最中見ぶつのひっそりした栈敷さじきうらを来たも同じだと思つた。

役者は舞台で飛んだり、刎はねたり、子供芝居が、ばたばたばた。

五

大当り、尺しゃくまと的てきに矢の刺さつただけは新粉屋の看板より念入なり。一面藤の花に、蝶々まで同じ絵を彩つた一張の紙幕を、船板塀の木戸口に渡して掛けた。正面前の処へ、筵しろを三枚ばかり、じとじとしたのを敷込んだが、日に乾くか、怪あやしい陽炎となつて、むらと立つ、それが舞台。

取巻いた小児こどもの上を、鮒ふな、鯰なまず、黒い頭、緋鯉ひごいと見たのは赤い切きれの結綿ゆいわた仮髪かつらで、幕の藤の花の末を煽あおって、泳ぐように視ながめられた。が、近附いて見ると、坂東、沢村、市川、中村、尾上、片岡、役者の連名も、如くだんのごとし件、おそば、お汁粉、牛鍋なんど、紫の房の下に筆ぶとに記してあつた……

松崎が、立寄つた時、カイカイカイと、ちようど塀の内うちで木が入つて、紺きものの衣服に、黒い帯した、円い臀しりが、蹠かかとをひよい、と上げて、頭からその幕へ潜つたのを見た。——筵舞台は行儀わるく、両方へ歪ゆがんだが。

半月形に、ほかほかとのぼせた顔して、取廻とこまわした、小さな見物、わやわやとまた一ひとと動揺よめき。

中に、目の鋭い屑屋くずやが一人、箸はしと籠かごを両方に下げて、挟んで食えそうな首は無しか、とじろじろと睨ねめ廻まわす。

もう一人、袷あわせの引解ひつときらしい、汚れた縞しまの単衣ひとえものに、緞よ緞よれの三尺で、頬ほ被おりした、ずんぐり肥ふとつた赤ら顔の兄哥あにいが一人、のっそり腕組うでぐみをして交まじる……

二人ばかり、十二三、四五ぐらいな、子守ちびの娘が、横よこちよ、と猪首いくびに小児こどもを背負しよつて、唄も唄わず、肩、背を揺ゆる。他は皆、茄子なすびの蔓つるに蛙かの子。

樂屋——その塀うちの中で、またカチカチと鳴った。

処へ、通とおから、ばらばらと駈かけて来た、別に二三人の小児を先に、奴やつこを振らせた趣で、

や！ あひとの美しい女と、中折なかおれの下に眉の濃い、若い紳士と並んで来たのは、浮世の底へ

霞あまくだを引いて、天降あまくだったように見えた。

ここだ、この音だ——と云ったその紳士の言ことばを聞いた、松崎は、やつぱり渠等かれらも囃子の

音なんによに誘われて、男女のどちらが言出したか、それは知らぬが、連立さつきつて、先刻の電車の

終点から、ともに引寄せられて来たものだと思った。

時に、その二人も、松崎も、大方この芝居の鳴物が、遠くまで聞えたのであろうと頷うなずく

……囃子はその癖、ここに尋ね当いつた現下いまは何も聞えぬ。……

絵の藤の幕間まくあいで、木は入ったが舞台は空しい。

「幕が長いぜ、開けろい。遣やらねえか、遣やらねえか。」

とずんぐり者の頬被ほおかぶりは肩を揺ゆつた。が、閉しつたばかり、いささかも長い幕間でない事が、

自分にも可笑おかしいか、鼻はな先なづさきの手拭てぬぐいの結目むすびめを、ひこひこと遣やつて笑う。

様子が、思いも掛けず、こんな場所、子供芝居の見物の群むれに来た、美しい女ひとに対して興

奮ふんしたものらしい。

實際、雲の青い山の奥から、うすいろどり淡彩の友染とも見える、名も知れない一輪の花が、細谷川を里近く流れ出でて、ふち淵の藍に影を留めて人目に触れた風情あり。石斑魚うぐいが飛んでも松葉が散つても、そのまま直ぐに、すらすらと行方も知れず流れよう、それをしばらくでも引留めるのは、ただちつとも早く幕を開ける外はない、と松崎の目にも見て取られた。

「頼むぜ頭取。」

ほおかぶり頼被がまた喚く。

六

あたかもその時、役者の名の余白に描いた、おかめ福面女、ひよつとこ瓢箪男の端をばさりと捲ると、さかやき月代茶色に、ごましお半白のちよん髷まげかつら仮髪で、眉毛の下った十ばかりの男の児が、こ渋団扇の柄を引搦ひつつかんで、ひよこりと登場。

「待つてました。」

と頼被が声を掛けた。

やつこ奴は、とぼけた目をきよろんと遣つたが、

「ちえ、小道具め、しようがねえ。」

と高慢な口を利いて、尻端折りの脚をすってん、刎ねるがごとく、二つ三つ、舞台をくるくると廻るや否や、背後向きに、ちよつきり結びの紺兵児の出尻で、頭から半身また幕へ潜つたが、すぐに摺抜けて出直したのを見れば、うどん、当り屋とのたくらせた穴だらけの古行燈を提げて出て、筵の上へ、ちよんと直すと、奴はその蔭で、膝を折って、膝開けに踏張りながら、件の洩団扇で、ばたばたと煽いで、台辞。

「米が高値いから不景気だ。媽々めにまた叱られべいな。」

でも、ちよつと含羞んだか、日に焼けた顔を真赤に俯向く。同じ色した洩団扇、ばさばさばさ、と遣つた処は巧緻いものなり。

「いよ、牛鍋。」と頬被。

片岡牛鍋と云うのであろう、が、役は鰻鮓屋の親仁である。

チャーン、チャーン……幕の中で鉦を鳴らす。

——迷児の、迷児の、迷児やあ——

呼ばわり連れると、ひよいひよいと三人出た……団栗ほどな背丈を揃えて、紋羽の襟巻を頸に巻いた大屋様。月代が真青で、鬢の膨れた色身な手代、うんざり鬢の俠が一

人、これが前へ立つて、コトン、コトンと棒を突く。

「や、これ、太吉さん、」

と差配様おおよさま声を掛ける。中の青月代あおさかやきが、提灯ちようちんを持替えて、

「はい、はい。」と返事をした。が、界隈かいわいの荒れた卵塔場から、葬礼とむらいあとを、引攪ひっさらつて来たらしい、その提灯は白張しらはりである。

大屋は、カーンと一つ鉦かねを叩いて、

「大分夜よが更けました。」

「亥刻いのこく過ぎでございましょう、……ねえ、頭かしら。」

「そうよね。」

と棒をコツン、で、くすくすと笑う。

「笑うな、真面目まじめに真面目に、」と頬被ほおひがまた声を掛ける。

差配様さはいさまが小首を傾け、

「時に、もし、迷児、迷児、と呼んで歩行あるしますが、誰だれ某それと名を申して呼びませいでも、分りますものでござりましょうかね。」

「私もわっしさ、思ってるんで。……どうもね、ただこう、迷児と呼んだんじゃ、前方さきで誰の事

だか見当が附くめえてね、迷児と呼ばれて、はい、手前でござい、と顔を出す奴もねえもんでさ。」とうんざり鬢が引取つて言う。

「まずさね……それで闇がりから顔を出せば、飛んだ妖怪でござりますよ。」

青月代の白男が、袖を開いて、両方を掌で圧え、

「御道理でございますとも。それがでございますよ。はい、こうして鉦太鼓で探搜に出ます騒動ではございますが、捜されます御当人の家へ、声が聞えますような近い所で、名を呼びましては、表向の事でも極が悪うございましょう。それも小児や爺婆ならまだしも、取つて十九という妙齡の娘の事でございますから。」

と考え考え、切れ切れに台辞を運ぶ。

その内も手を休めず、ばつばつと赤い団扇、火が散るばかり、これは鮮明。

七

青月代は辿々しく、

「で、でございますから、遠慮をしまして、名は呼びません、でございましたが、おつしや

る通り、ただ迷児迷児と喚わめきました処で分るものではございません。もう大分町も離れた、徐々そろそろ娘の名を呼びましょう。」

「成程々々、御心附至極の儀。そんなら、ここから一つ名を呼んで捜す事にいたしましたしょう。頭かしら、音頭を願おうかね。」

「迷児の音頭は遣りつけねえが、ままよ。……差配おおよさん、合方だ。」
チャーンと鉦かねの音。

「お稲いなさんやあ、——トこの調子かね。」

「結構でございますね、差配さん。」

差配はも一つ真顔でチャーン。

「さて、呼声に名が入りますと、どうやら遠い処で、幽かすかに、はあい……」と可哀あわれな声。

「変な声だあ。」

と頭かしらは棒ゆすを揺ゆすつて震える真似する。

「この方、総入歯で、若い娘の仮声こわいろだちね。いえさ、したが無となく返事をしそうです、大に張合おおきが着きましたよ。」

「その気で一つ伸のみましょうよ。」

三人この処で、声を揃えた。チャーン――

「――迷兎の、迷兎の、お稲さんやあ……」

と一列^{ひとなら}び、筵^{むしろ}の上を六尺ばかり、ぐるりと廻る。手足も小さく仇^{あど}ない顔して、目立つた^{かつら}髪^{まげ}の鬘^{むぎわらざい}ばかり。麦藁^{むぎわら}細工^{さいく}が化けたようで、黄色の声で長^ませた事、ものを云う笛を吹くか、と希有^{けふ}に聞える。

美しい女^{ひと}は、ずっと薄色^{パラソル}の洋傘を閉めた……ヴェールを脱いだように濃い浅黄の影が消える、と露の垂りそうな清^{すずし}い目で、同伴^{つれ}の男に、卜瞳^{たちどま}を注ぎながら舞台を見返す……その様子が、しばらく立停^{たちどま}ろうと云うらしかった。

鍋焼^{なべやき}餛飩^{うどん}……」

と高らかに、舞台で目を眠るまで仰向^{あおむ}いて呼んだ。

「……ああ、腹が空いた、餛飩屋。」

「へいへい、頭^{かしら}、難^{ありがと}有うござります。」

うんざり^{びん}鬘^{びん}は額を叩いて、

「おっと、礼はまだ早かろう。これから相談だ。ねえ、太吉さん、差配さん、ちよつぷり暖まって、行こうじゃねえかね。」

「賛成。」

と見物の頬被りは、反そりを打って大おおに笑う。

仕種しぐさを待構えていた、鰻鮓屋小僧は、これから、割前わりまえの相談でもありそうな処を、もどかしがつて、

「へい、お待遠様で。」と急いで、渋団扇で三人へ皆配る。

「早いんだい、まだだよ。」

と差配になったのが地声で甲走かんぱしった。が、それでも、そろそろそろと口で言い言
い三人、指二本で搔か込む仕形しかた。

「頭かしら、……御町内様も御苦労様でございます。お捜しなさいますのは、お子供衆で？」

「小兒なものかね、妙齡としごろでございますよ。」

と青月代が、襟しほを扱あいて、ちよつと色身で応答あしうう。

「へい、お妙齡、殿方でござりますか、それともお娘御で。」

「妙齡の野郎と云う奴があるもんか、初厄べつびんの別嬪べっぴんさ。」と頭かしらは口で、そろりそろり。

「ああ、さて、走り人びとでござりますの。」

「はしり人というのじゃないね、同じようでも、いずれ行方は知れんのだが。」

と差配は、チンと涙はなをかむ。

美しい女ひとの唇くちびるに微笑ほほえみが見えた……

「いつの事、どこから、そのお姿が見えなくなりました。」

と鰻鮎屋は、洗団扇むしろを筵むしろに支ついて、ト中腰きになつて訊く。

八

差配おおよは溜息ためいきと共に氣取うなずつて頷うなずき、

「いつ、どこでと云つてね、お前めえ、縁日の宵の口や、顔見世の夜明から、見えなくなつた
というのじゃない。その娘はね、長い間煩めづらつて、寝ていたんだ。それから行方ゆくえが知れな
くなつたよ。」

子供芝居の取留せりふめのない台辞せりふでも、ちつと変な事を言う。

「へい。」

舞台の鰻鮎屋も異な顔で、

「それでは御病氣を苦になさつて、死ぬ氣で駈出かけだしたのでござりますかね。」

「寿命だよ。ふん、」と、も一つかんで、差配は鼻紙を袂へ落す。

「御寿命、へい、何にいたせ、それは御心配な事で。お怪我がなければ可うございます。」

「賽の河原は礫原、石があるから躓いて怪我をする事もあるかね。」と陰気に差配。
「何を言わつしやります。」

「いえさ、鰻鮓屋さん、合点の悪い。その娘はもう亡くなったんでございますよ。」と青月代が傍から言つた。

「お前様も。死んだ迷児という事が、世の中にござりますかい。」

「六道の闇に迷えば、はて、迷児ではあるまいか。」

「や、そんなら、お前様方は、亡者をお捜しなさりますのか。」

「そのための、この白張提灯。」

と青月代が、白粉の白けた顔を前へ、トぶらりと提げる。

「搜いて、搜いて、暗から闇へ行く路じや。」

「ても……気味の悪い事を言いなさる。」

「鰻鮓屋、どうだ一所に来るか。」

と頭は鬼のごとく棒を突出す。

鰻鮓屋は、あツと尻餅。

引被ひつかぶせて、青月代が、

「ともに冥途めいどへ連行つれゆかん。」

「来れや、来れ。」と差配おおよは異変な声こわづろい 繕きた。

一堪ひとたまりもなく、鰻鮓屋はのめり伏した。渋団扇で、頭を叩くと、ちよん 鬢まげ仮髪かつらが、

がさがさと鳴る。

「占めたぞ。」

「喰遁くいにげ。」

と囁ささき合うと、三人の児こは、ひよいと躍つて、蛙のようにポンポン飛込む、と幕の蔭に
声ばかり。

——迷児の、迷児の、お稲さんやあ——

描ける藤は、どんよりと重く匂つて、おなじ色に、閃々きらきらと金糸のきらめく、美しい女ひと
の半襟と、陽炎に影を通わす、居周囲いまわりは時に寂寞ひっそりした、楽屋の人数にんずを、狭い処に包んだせ
いか、張紙幕びらまくが中ほどから、見物に向いて、風を孕はらんだか、と膨れて見える……この影が
覆蔽かぶさるであらう、破やれむしろ 筵は鼠色に濃くなつて、蹲しゃがみ込んだ児等こどもの胸へ持上つて、蟻ありが四

五足、うようよと這^はつた。……が、なぜか、物の本の古びた表面^{おもて}へ、——来れや、来れ……と仮名でかきちらす形がある。

見つつ松崎が思うまで、来れや、来れ……と言った差配^{おおよ}の言葉は、怪しいまで陰に響いて、幕の膨らんだにつけても、誰か、大人が居て、蔭で声^すを助けたらしく聞えたのであった。

見物の児等は、神妙に黙って控えた。

ほわかぶり

頬被^{ほわかぶり}のずんぐり者は、腕を組んで立ったなり、こくりこくりと居眠る……

鰻鮓屋が、ぼやんとした顔を上げた。さては、差置いた荷のかわりの行燈^{あんどん}も、草紙の絵ではない。

蟻は隠れたのである。

九

「狐か、狸か、今のは何じやい、どえらい目に逢わsekさった。」
と鰻鮓屋は坂塀はずれに、空屋の大屋根から空を仰いで、茫然^{ぼんやり}する。

美しい女ひとと若い紳士の、並んで立った姿が動いて、両方木賃宿きちんやどの羽目板の方を見向いたのを、——無台が寂しくなったため、もう帰るのであらうと見れば、さにあらず。

そこへ小さな縁台を据えて、二人の中に、ちよんぼりとした円まるまげ髷を俯向けうつむに、揉手もみてでお叩頭しげをする古女房が一人居た。

「さあ、どうぞ、旦那様、奥様、これへお掛け遊ばして、いえ、もう汚いのでございますが、お立ちなすつていらつしやいますより、ちつとは増ましでございます。」

と手拭てぬぐいで、ごしごし拭いを掛けつつ云う。その手で——一所に持つて出たらしい、踏台が一つに乗せてあるのを下へおろした。

「いや、俺おれたちは、」

若い紳士は、手首白いのを挙げて、払い退のけそうにした。が、美しい女ひとが、意を得たという晴やかな顔して、黙つてそのまま腰を掛けたので。

「難ありがと有う。」

渠かれも齊ひとしく並んだのである。

「はい、失礼を。はいはい、はい、どうも。」と古女房は、まくし掛けて、早口しやべに饒舌うしろりながら、踏台を提げて、小児こどもたちの背後うしろを、ちよこちよこ走り。で、松崎の背後うしろへ廻る。

「貴方様は、どうぞこれへ。はい、はい、はい。」

「恐縮ですな。」

かねて期したるものごとく猶予らわず腰を落着けた、……松崎は、美しい女とその連とが、去る去らないにかかわらず、——舞台の三人が鉦をチャーンで、迷児の名を呼んだ時から、子供芝居は、とにかくこの一幕を見果てないうちは、足を返すまいと思つていた。声々に、可哀に、寂しく、遠方を幽に、——そして幽冥の界を暗から闇へ捜廻ると言つた、厄年十九の娘の名は、お稲と云つたのを鋭く聞いた——仔細あつて忘れられぬ人の名なのであるから。——

「おかみさん、この芝居はどういう筋だい。」

「はいはい、いいえ、貴下、子供が出たらめに致しますので、取留めはございませんよ。何の事でございますか、私どもは一向に分りません。それでも稽古だの何のと申して、それは騒ぎでございましてね、はい、はい、はい。」

で手を揉み手を揉み、正面には顔を上げずに、ひよこひよこして言う。この古女房は、くたびれた藍色の半纏に、茶の着もので、紺足袋に雪駄穿で居たのである。

「馬鹿にしやがれ。へッ、」

と唐突に毒を吐いたは、立睡りで居た頬被りで、弥蔵の肱を、ぐいぐいと懷中から、八ツ当りに突掛けながら、

「人、面白くもねえ、貴方様お掛け遊ばせが聞いて呆れら。おはいはい、襟許に着きやがって、ヘッ。俺の方が初手ツから立つてるんだ。衣類に脚が生えやしめえし……草臥れるんなら、こつちが前だい。服装で価値づけをしやがって、畜生め。ああ、人間下りたくはねえもんだ。」

古女房は聞かない振で、ちよこちよこと走って退いた。一体、縁台まで持添えて、どこから出て来たのか、それは知らない。そうして引返したのは町の方。

そこに、先刻の編笠目深な新粉細工が、出岬に霞んだ捨小舟という形ちで、寂寥としてまだ一人居る。その方へ、ひよこひよこ行く。

ト頬被りは、じろりと見遣つて、

「ざまあ見ろ、巫女の宰相、活きた兄哥の魂が分るかい。ヘッ、」と肩をしやくりながら、ぶらりと見物の群を離れた。

ついでに言おう、人間を挟みそうに、籠と竹箸を構えた薄気味の悪い、默然の屑屋は、古女房が、そつち側の二人に、縁台を進めた時、ギロリと踏台の横穴を覗いたが、そ

れ切りフイと居なくなつた。……

いま、腰を掛けた踏台の中には、ト松崎が見ても一枚の屑も無い。

十

「おい、出て来ねえな、おお、大入道、出じやねえか、遅いなあ。」

少々舞台に間が明いて、魅つままれたなりの鑑うけん師し僧そうは、てれた顔で、……幕越しに樂屋を呼んだ。

幕の端はじから、以前の青月代あおさかやきが、黒坊くろんぼの気か、俯うつむ向けに仮髪かつらばかりを覗のぞかせた。が、その絵えの、狐きつねの面が抜出したとも見えるし、古綿ふるわたの黒雲から、新粉細工しんこなの三日月みづきが覗くとも覗のぞめられる。

「まだじやねえか、まだお前、その行燈あんどんがかがみにならねえよ……科しぐさが抜けてるぜ、早く演やんねえな。」

と云つて、すばりと引込ひっこむ。——はてな、行燈あんどんが、かがみに化ける……と松崎は地の凸で凹こぼこする踏台ふみだいの腰を乗出す。

同じ思いか、面影おもかげも映しそうに、美しい女は凝ひとじつと視みた。ひとり紳士は気の無い顔して、反身そりみながらぐったりと凭掛よりかかった、杖の柄を手袋の尖で突いたものなり。

鯉鮓屋は、行燈に向直ると、誰も居ないのに、一人で、へたへたと挨拶あいさつする。

「光栄おいでなさいまし。……直ぐと暖めて差上げます。今、もし、飛んだお前さん、馬鹿な目に逢いましてね、火も台なしでござります。へい、辻の橋の玄徳げんとく稲荷様は、御身分柄、こんな悪戯いたずらはなさりません。狸か獺かわうそでござりましょう。迷児の迷児の、——と鉦かねを敲たたいて来やがって鯉鮓を八杯攫さりました……お前さん。」

と滑稽おどけた眉毛を、寄せたり、離したり、目をくしゃくしゃと饒舌しゃべったが、

「や、一言いちごんも、お返事なしだね、默然だんまりぼう坊様。鼻だの、口だの、ぴこぴこ動いてばかり。

……あれ、誰か客人だと思つたら——私の顔だ——道理で、兄弟分だと頼母たのもしかつたに……

……宙に流れる川はなし——七夕様でもないものが、銀河あまのがわには映るまい。星も隠れた、

真暗まっくら、——

と仰向けあおむに、空を視みる、と仕掛けがあつたか、頭の上のその板塀越ていし、幕の内か潜くぐらして、両方を竹で張まつた、真黒まっくろな布の一張ひとはり、筵むしろの上へ、ふわりと投げて颯さつと拈ひげた。

と見て、知りつつ松崎は、俄然がぜんとして雲が湧わいたか、とぎよつとした、——電車はあつ

ても——本郷から遠路を掛けた当日。麗さも長閑さも、余り積つて身に染むばかり暖かさが過ぎたので、思いがけない俄雨を憂慮ぬではなかった処。

彼方の新粉屋が、ものの遠いように霞むにつけても、家路遙かな思いがある。

また、余所は知らず、目の前のざつと劇場ほどなその空屋の裡には、本所の空一面に漲らす黒雲は、畳込んで余りあるがごとくに見えた。

暗い舞台で、小さな、そして爺様の饅飩屋は、おつかな、吃驚、わなわな大袈裟に震えながら、

「何に映る……私が顔だ、——行燈か。まさかとは思うが、行燈か、行燈か？……返事をせまいぞ。この上手前に口を利かれては叶わねえ。何分頼むよ。……面の皮は、雨風にめくれたあとを、幾たびも張替えたが、火事には人先に持つて遁げる何十年以来の古馴染だ。

馴染がいにも口を利くなよ、私が呼んでも口を利くなよ。はて、何に映る顔だ知らん。……口を利くな、口を利くな。」

……と背の低いのが、滅入込みそうに、大な仮髪の頸を窘め、ひツつりそうな拳を二つ、耳の処へ威すがごとく、張肱に、しつかと握つて、腰をくなくなど、拔足差足。

で、目を据え、眉を張って、行燈に擦寄り擦寄り、

「はて、何に映った顔だ知らん、行燈か、行燈か、……口を利くなよ、行燈か。」
と熟と覗く。

途端に、沈んだが、通る声で、

「私……行燈だよ。」

「わい、」と叫んで、鯔鮓屋は舞台を飛退く。

十一

この古行燈が、仇も情も、赤くこぼれた丁子のごとく、煤の中に色を籠めて消えずにいて、それが、針の穴を通して、不意に口を利いたような女の声には、松崎もぎよつとした。

鯔鮓屋は吃驚の呼吸を引いて、きよとんとしたが
「俺あ可厭だぜ。」と押殺した低声で 独言を云ったと思うと、ばさりと幕摺れに、ふらついて、隅から蹠跟け込んで見えなくなつた。

時に——私……行燈だよ、——と云つたのは、美しい女ひとである事に、松崎も心附いて、
——驚いて楽屋へ遁にげた小児こどもの状さまの可笑おかしさに、莞爾にっこり、笑えみを含んだ、燃ゆるがごときその
女ひとの唇を見た。

「つい言ツちまつたのよ。」

と紳士を見向く。

「困つた人だね、」

ステッキ
と杖を取つて、立構えをしながら、

「さあ、行こうか。」

「可いいわ、もうちつと……」

「恐こわ怖わいよう。」

と子守たもとの袂たもとにぶら下つた小さな児が袖を引張ひっぱつて言う。

「こわいものかね、行燈じゃないわ。……綺麗な奥さんが言つたんだわ。」とその子守は
背せなの子こを揺ゆり上げた。

舞台を取巻いた大勢が、わやわやとざわついて、同音に、声を揚あげて皆笑みんなつた……小さ
いのが二側ふたかわみかわ三側みかわ、ぐるりと黒く塊かたまつたのが、変にここまで間まを措おいて、思出したように、

遁^{にげ}込んだ鰻^{うなぎ}鮓^{すし}屋の滑稽な図を笑ったので、どつというのが、一つ、町を越した空屋の裏あたりに響いて、壁を隔てて聞くようにぼやけて寂しい。

「東西、東西。」

青月^{あおさかやき}代^{しろみ}が、例の色身に白い、膨^{ふつく}りした童^{わらわ}顔^{がお}を真^ま正^{しょう}面^{めん}に舞台に出て、猫が耳を撫^なでる……トいった風で、手を挙げて、見物を制しながら、おでんと書いた角行燈をひよいと廻して、ト立直して裏を見せると、かねて用意がしてあった……その一小間^{ひとこま}が藍^{あい}を濃^{まつさお}く真^ま青^{せい}に塗^ぬつてあった。

行燈が化けると云った、これが、かがみのつもりでもあろう、が、上を蔽^{おほ}うた黒布の下に、色が沈んで、際立つて、ちようど、間近な縁台の、美しい女^{ひと}と向^{むきあ}合せに据えたので、雪^{おもて}なす面^{おもて}に影を投^なげて、媚^{なまめ}かしくも凄^{すご}くも見える。

青月代は翻^{ひらり}然^{くく}と潜^{くぐ}った。

それまでは、どれもこれも、吹矢に当つて、バツタリと細工ものが顕^{あらわ}れる形に、幕へ入りのひよつこらさ加減、絵に描^かいた、小松茸^{こまつたけ}、大きな蛤^{はまぐり}十ばかり一所に転^{ころ}げて出^でそうであつたが。

舞台に姿見の蒼^{あお}い時よ。

はじめて、白玉のごとき姿を顕す……一人の立女形、撫肩しなりと脛をしめつつ棲を取った状に、内端に可愛らしい足を運んで出た。糸も掛けない素の白身、雪の練糸を繰るように、しなやかなものである。

背丈恰好、それも十一二の男の児が、文金高髻の仮髪して、含羞だか、それとも芝居の筋の襦染のためか、胸を叩える俯向き加減、前髪の冷たさが、身に染む風情に、すべてと白い肩をすくめて、乳を隠す嬌態らしい、片手柔い肱を外に、指を反らして、ひたりと附けた、その頤のあたりを蔽い、額も見せないで、なよなよと筵に雪の踵を散らして、静に、行燈の紙の青い前。

十二

綿かと思う柔な背を見物へ背後むきに、その擬えし姿見に向って、筵に坐ると、しなつた、細い線を、左の白脛に引いて片膝を立てた。

この膝は、松崎の方へ向く。右の搔込んで、その腰を据えた方に、美しい女と紳士の縁台がある。

まだ顔を見せないで、打向つた青行燈の抽斗ひきだしを抜くと、そこに小道具の支度があつた……白粉刷毛おしろいばけの、夢の覺際さめざわの合歡ねむの花、ほんのりとあるのを取つて、媚なまめかしく化粧をし出す。

知つてはいても、それが男の児とは思われない。耳朶みみたぼに黒子ほくろも見えぬ、滑なめらかな美しさ。松崎は、むぎと集たかつて血を吸うのが傷いたしさに、蹈台ふみだいの蚊かをしきりに氣にした

蹈台の蚊は、おかしいけれども、はじめ腰掛けた時から、間を措おいては、ぶんと一つ、ぶんとまた一つ、穴から唸うなつて出る……足と足を摺すり合あわせたり、頭かぶりを掉ふつたり、避よけつ払いつつしていたが、日脚の加減か、この折から、ぶくぶくと溝どぶから泡の噴ていく体に数を増した。人情、なぜか、筵たたの上のその皓体こうたいに集たからせたくないので、背後うしろへ、町へ、両の袂たもとを叩いて払つた。

そして、この血に餓うえて呻うめく虫の、次第いきおいに勢を加えたにつけても、天氣模様の憂慮きづかわしさに、居ながら見渡されるだけの空を覗のぞいたが、どこのか煙筒えんとつの煙の、一方に雪崩なだれたらしい隈くまはあつたが、黒しと怪あやしむ雲はなかつた。ただ、町の静しずか。板の間の乾からびた、人なき、広い湯殿のようで、暖い霞の輝きらいて淀よどんで、漾ただよい且つ漲みなぎる中に、蚊を思うと、その形、むらむら波を泳ぐ海月くらげに似て、槩ほこを横よこえて、餓うえたる虎の唄うたを唄うたつて匆はねる。……

この影がさしたら、四ツ目あたりに咲き掛けた紅白の牡丹ぼたんも曇ろう。……はし嘴を鳴らして、ひらりひらりと縦横無尽に踊る。

が、うつつ現なの光景ありさまは、長閑な日中ひなかの、それが極度であつた。――

やがて、蚊ばかりではない、舞台で狐やら狸やら、太鼓たたを敲き笛を吹く……本所名代の楽器に合せて、猫が三足。小夜具こよぎを被かぶつて、仁王立だち、一斗樽だるの三ツ目入道、裸の小兒こどもと一所になつて、さす手の扇、ひく手の手拭、揃つて人も無げに踊おどり出した頃は、にわかあ俄雨めを運ぶ機関車のごとき黒雲が、音もしないで、浮世やぶれの破めを切張きりばりの、木賃宿の数の行燈、薄暗いまで屋根を圧して、むくむくと、両国橋から本所の空を渡つたのである。

次第は前後した。

これより前さき、姿見に向つた裸の児が、濃い化粧で、襟えり白粉おしろいを襟長く、くつきりと粧よそおうと、カタンと言わして、刷毛はけと一所に、白粉を行燈の抽斗ひきだしに蔵しまつた時、しなりとした、立膝のままで、見物へ、ひよいと顔を見せたと思え。

島田ばかりが房々ふさふさと、やあ、目も鼻も無い、のつぺらぼう。

唇ばかり、埋め果てぬ、雪の紅梅、蕊しべ白く莞爾にっこりした。

はつと美しい女ひとは身を引いて、肩を摺すつた羽織の手先を白々と紳士の膝へ。

額も頬も一分、三分、小鼻も隠れたまで、いや塗ったところさえ。白粉で消した顔とは思うが、松崎さえ一目見ると変な気がした。

そこへ、件くだんの三ツ目入道、どろどろどろと頭あたまれけり

十三

樽はりこを張子で、鼠色の大入道、金銀張分けの大の眼まなこを、行燈見越みこしに立たちはだから、と縄からげの貧乏徳利どつくりをぬいと突出す。

「丑満うしみつの鐘を待兼ねたやい。……わりや雪女。」

とドス声で甲かんを殺す……この熊くま漢まことの前に、月からこぼれた白い兎うさぎ、天人の落し児と
いった風情の、一束ひとつかねの、雪の膚はだは、さては化夥間ばけなかまの雪女であつた。

「これい、化粧が出来たら酌をしろ、ええ。」

と、どか胡坐あぐら、で、着ものの裾すそが堆うずたかい。

その地響さまきが膚こたに應えて、震える状に、脇の下を窄すぼめるから、雪女は横坐りに、
「あい、」と手を支く。

「そりや、」

と徳利を突出した、入道は懷から、鮑貝あわびがいを掴取つかみとって、胸を広く、腕へ引着け、雁がんの首を捻ねじるがごとく白鳥の口から注つがせて、

「わりや、わなわなと震えるが、素膚すはだに感じるか、いやさ、寒いか。」と、じろじろと視みめて寛々たり。

雪女細い声。

「はい……冷とうござんすわいな。」

「ふん、それはな、三途河そうずかの奪衣婆だつえばに衣きものを剥はがれて、まだ間が無うて馴なれぬからだ。ひくひくせずと堪たえくされ。雪女が寒いと吐ぬすと、火が火を熱い、水が水を冷い、貧乏人が空ひ腹だるいと云うようなものだ。汝うぬが勝手の我ままだ。」

「情なさけない事おつしやいます、辛うて辛うてなりませんもの。」

とやつぱり戦わななく。その姿、あわれに寂しく、生々なまなまとした白魚の亡者に似ている。

「もつともな、わりや……」

言い掛けた時であった。この見越入道、ふと絶句で、大な樽おおきの面つらを振って、三つ目を六つに晃々ぎらぎらときよろつかす。

幕の蔭と思う絵の裏で、誰とも知らず、静まった藤の房に、生なまぬる温い風の染むけはい氣勢で、

「……紅蓮ぐれん、大紅蓮、紅蓮、大紅蓮……」と後見うしろをつけたものがある。

「紅蓮、大紅蓮の地獄きたに來つて、」

と大入道は樽の首を揺ゆりす据えた。

「わりや雪女となりおつた。が、魔道の酌しゃくとり取、枕まくらぞい添、芸妓げいしや、遊女じよろうのかえ名と云うのだ。娑婆しゃば、人間の処女きむすめで……」

また絶句して、うむと一つ、樽に呼吸いきを詰めて支つかえると、ポカンとした叩頭おしぎをして、

「何だっけね、」

と可愛い声。

「お稲、」と雪女が小さく言つた。

松崎は耳を澄ます。

と同時であつた。

「……お稲、お稲さんですつて、……」と目のふちに、薄く、行燈の青い影が射さした。美しい女ひとは、ふと紳士を見た。

「お稲荷いなり、稲荷さんと云うんだね、白狐しろぎつねの化けた処なんだろう。」

わけもなくそう云つて、紳士は、ぱつと巻まきた蓑ばこに火を点ずる。

その火が狐火のように見えた。

「ああ、そうなのね。」

美しい女は頷うなずいたのである。

松崎も、聞いて、成程そうらしくも見て取つた。

「むむ、そのお稲で居た時の身の上話、酒の肴さかなに聞かさんかい。や、ただわなわなと震えくさる、まだ間が無うて馴れぬからだ。こりや、」

と肩へむずと手を掛けると、ひれ伏して、雪女は溶けるように漕さめ然さめと泣く。

十四

「陰気だ陰気だ、此奴滅入こいつめいつて気が浮かん、こりや、汝等わいら出て燥はしげやい。」

三ツ目入道、懐手の袖を刎はねて、飽あわび貝つかいの杯を、大でく弧かを描えいて楽屋を招く。

これの合図に、相馬内裏そうまだいり古御所の管絃。笛、太鼓に鉦かねを合あわせて、トツピキ、ひやら、ひやら、テケレンどん、幕を煽あおつて、どやどやと異類異形が踊いつて出た。

狐が笛吹く、狸が太鼓。猫が三足、赤手拭、すつとこ被り、吉原かぶり、ちよと吹流し、と気取るも交つて、猫じや猫じやの拍子を合わせ、トコトンと筵を踏むと、塵埃立交る、舞台上に赤黒い渦を巻いて、吹流しが腰をしゃなりと流すと、すつとこ被りが、ひよいと刎ねる、と吉原被りは、ト招ぎの手附。

狸の面、と、狐の面は、差配の禿と、青月代の仮髪のまま、鰻鮎屋の半白頭は、どっち付かず、魑のような面を着て、これが鉦で。

時々、きちききちきちきちきという。狐はお定りのコンを鳴く。狸はあやふやに、モウと唸って、膝にのせた、腹鼓。

囃子に合わせて、猫が三足、踊る、踊る、いや踊る事わ。

青い行燈とその前に突伏した、雪女の島田のまわりを、ぐるりぐらりと廻るうちに、三ツ目入道も、ぬいと立つて、のしのしと踊出す。

続いて囃方惣踊り。フト合方が、がらりと替つて、楽屋で三味線の音を入れた。

——必ずこの事、この事必ず、丹波の太郎に沙汰するな、この事、必ず、丹波の太郎に沙汰するな——

と揃つて、異口同音に呼ばわりながら、水車を舞込むごとく、次第びきに、ぐるぐ

るぐる。……幕へ衝と消える時は、何ものか居て、操りの糸を引手繰るように颯と隠れた。筵舞台に残ったのは、青行燈と雪女。

悄れて、一人、ただうなだれているのであった。

上なる黒い布は、ひらひらと重くなった……空は化物どもが惣踊りに踊る頃から、次第に黒くなったのである。

美しい女は、はずして、膝の上に手首に掛けた、薄色のシヨオルを取って、撫肩の頸に掛けて身繕い。

此方に松崎ももう立とうとした。

青月代が、ひよいと覗いた。幕の隙間へ頤を乗せて、

「誰か、おい、前掛を貸してくんな、」と見物を左右に呼んだ。

「前掛を貸しておくれよ、……よう、誰でも。」

美しい女から、七八人小児を離れて、二人並んでいた子守の娘が、これを聞くと真先に

にあとじさりをした。言訳だけでも赤い紐の前掛をしていたのは、その二人ぐらいなもので、

……他は皆、横撫での袖とくいこぼしの膝、光るのはただ垢ばかり。

傍から、また鰐鮓屋が出て舞台へ立った。

「これから女おんながた形かたちが演しん処どころなんだぜ。居所きょ所がわりになるんだけれど、今度は亡者むしやじゃねえよ、活いきてる娘むすめの役やくだもの。裸はだかでは不可いけえや、前まえ垂たれを貸かしとくれよ。誰たれか、」

「後ご生しょうだつてば、」

と青月代も口を添える。

子守しよの娘むすめはまた退しよつた。

幼い達たちは妙たふにてれて、舞台ぶたいの前まえで、土つちをいじつて俯うつむ向むいたのもあるし、ちよろちよろ町まちの方はうへ立たつのもあつた。

「吝しみれだなあ。」

鯉鮓屋こしよやがチョツ、舌打しようちする。

「貸かしてくれてんだぜ、……きつと返かへすツてえに。……可かわい哀そう相そうじやないか、雪女ゆきめになつたなりで裸はだかで居ゐら。この、お稲いなさんに着きせるんだよ。」

と青月代も前へ出て、雪女ゆきめの背筋せきのあたりを冷ひやたそうに、ひとり叩たたいた……

「前掛まえかけでなくては。不可いけいの？」

美しい人ひとはすツと立たつた。

紳士しんしは仰あおむ向むいて、妙たふな顔かお色しき。

松崎の、うっかり帰られなくなつたのは言うまでもなからう。

十五

「兄さん、他のものじや間に合わない？」

あきれ顔な舞台の二人に、美しい女は親しげにそう云つた。

「他の物つて、」と青月代は、ちよんぼり眉で目をぱちくる。

「羽織では。」

美しい女は華奢な手を衣紋に当てた。

「羽織なら、ねえ、おい。」

「ああ、そんな旨え事はねえんだけれど、前掛でさえ、しみつたれているんだもの、貸すもんか。それだしね、羽織なんて誰も持つてやしませんぜ。」

と饅飴屋は吐出すように云う。成程、羽織を着たものは、ものの欠片も見えぬ。

「可ければ、私のを貸してあげるよ。」

美しい女は、言の下に羽織を脱いだ、手のしなないは、白魚が柳を潜つて、裏は篝火が

ちらめいた、雁がねむすびの紋と見た。

「品子さん、」

紳士は留めようとして、ずツと立つ。

「可いのよ、貴方。」

と見返りもしないで、

「帯がないじゃないか、さあ、これが可いわ。」と一所に肩を這った、その白と、薄紫と、山が霞んだような派手な羅のシヨオルを落してやる……

雪女は、早く心得て、ふわりとその羽織を着た、黒縮緬の紋着に緋を襲ねて、霞を腰に、前へすらりと結んだ姿は、あたかも可し、小児の丈に裾を曳いて、振袖長く、影も三尺、左右に水が垂れるばかり、その不思議な媚しさは、貸小袖に魂が入って立ったとも見えるし、行燈の灯を覆うた襦袢の袂に、蝴蝶蝶が宿って、夢が徜徉とも見える。

「難有う、」

「奥さん難有う。」

互に、青月代と鰐鮓屋が、仮髪を叩いて喜び顔。

雪女の、その……擬えた……姿見に向って立つ後姿を、美しい女は、と視めて、

「島田も可いこと、それなりで角かくしをさしたいようだわ……ああ、でも扱帯しじぎを前帯しじぎじやどう。遊女おいらんのようではなくって、」

「構わないの、お稲さんが寝衣ねまきの処だから、」

「ああ、ちよつと。」

と美しい女ひとが留める間に、聞かれた鰻鮎屋はツイと引込ひっこむ。

「あら、やつぱりお稲さん、お稲さんですわ、貴方。」

と言う。紳士を顧みた美しい女ひとの睫まつげが動いて、目瞼まぶたが屹きつと引緊ひきしまった。

「何、稲荷いなりだよ、おい、稲荷だろう。」

紳士も並んで、見物の小児こどもの上から、舞台へ中折なかおれを覗のぞかせた。

「ねえ、この人の名は？……」

黒縮緬の雪女は、さすが一座に立女形たておやまの見識を取ったか、島田の一さえ、端然きちんと済まして口を利こうとしないので、美しい女ひとはまた青月代に、そう訊きいた。

「嵐お萩ツてえの……東西々々。」

と翻然ひらりと隠れる。

「芸名げいみょうではない。役の娘の名を聞かしておくれ、何て云うの、よ、お前。」

と美しい女は、やや急込んで言つて、病身らしく胸を压えた。脱いだ羽織の、肩寒そうな一枚小袖の嬌娜姿、雲を出でたる月かと視れば、離れた雲は、雪女に影を宿して、墨絵に艶ある青柳の枝。

春の月の凄きまで、蒼青な、姿見の前に、立直つて、
「お稲です。」

と云つて、ふと見向いた顔は、目鼻だち、水に朧なものではなかつた。

十六

舞台は居所がわりになるのだ、と楽屋のものが云つた、——俳優は人に知らさないのを手際に化ものの踊るうち、俯向伏している間に、玉の曇を拭つたらしい。……眉は鮮麗に、目はぱつちりと張を持つて、口許の凜とした……やや強いが、妙齡のふつくりとした、濃い生際に白粉の際立たぬ、色白な娘のその顔。

松崎は見て悚然とした……

名さえ——お稲です——

に肖たとは迂哉。今年如月、紅梅に太陽の白き朝、同じ町内、御殿町あたりのある家の門を、内端な、しめやかな葬式になつて出た。……その日は霜が消えなかった——居周囲の細君女房連が、湯屋でも、髪結でもまだ風説を絶さぬ、お稲ちゃんと云つた評判娘にそっくりなのであつた。

「私も今はじめて聞いて吃驚したの。」

その時、松崎の女房は、二階へばたばたと駈上り、御注進と云う処を、鎧が縞の半纏で、草摺短な格子の前掛、ものが無常だけに、ト手は飜さず、すなわち尋常に黒縹子の襟を合せて、火鉢の向うへ中腰で細くなる……

髪も櫛巻、透切れのした縹子の帯、この段何とも致方がない。亭主、号が春狐であるから、名だけは蘭菊とでも奢つておけ。

春狐は小机を横に、座蒲団から斜になつて、

「へーい、ちつとも知らなかつた。」

「私もさ……今ね、内の出窓の前に、お隣家の女房さんが立つて、通の方を見てしくしく泣いていなさるから、どうしたんですって聞いたんです。可哀相に……お稲ちゃんのお葬式が出る所だつて、他家の娘でも最惜くつてしようがないって云うんでしょう。——そ

う云えば成程何だわね、この節じや多^{しばらく}日姿を見なかったわね、よくお前さん、それ、あの娘^こが通ると云うと、箸をカチリと置いて出窓から、お覗^{のぞ}きだっけがね。」

苦笑いで、春狐子。

「余計な事を言いなさんな、……しかし惜^{おし}いね、ちよつとないぜ、ここいらには、あのくらい一枚絵は。」

「うっかり下町にだつてあるもんですか。」

「などと云うがね、お前もお長屋月並だ。……生きてるうちは、そうまでは讃^ほめない奴^{やつ}さ、顔がちつと強^{きつ}すぎる、何のつてな。」

「ええ、それは廂^{ひさしがみ}髪でお茶の水へ通つてた時ですわ。もう去年の春から、娘になつて、島田に結つてからといったら、……そりや、くいっきたいようだったの。」

髪^{いんづつ}のいい事なんて、もつとも盛^{さかり}も盛^{さかり}ただれども。」

「幾^{いくつ}歳だ。」

「十九……明けてですよ。」

「ああ、」と思わず煙^{きせる}管を落した。

「勿論、お婿さんは知らずらしいね。」

「ええ、そのお婿さんの事で、まあ亡くなつたんですよ。」
はつと思ひ、

「や、自殺か。」

「おお吃驚した……慌てるわねえ、お前さんは。いいえ、自殺じゃないけれども、私の考えだと、やつぱり同一だわ、自殺をしたのも。」

「じやどうしたんだよ。」

「それがだわね。」

「焦つたい女だな。」

「ですから静にお聞きなさいなね、稲ちやんの内じゃ、成りたけ内証に秘していたんだ
そうですけれど、あの娘はね、去年の夏ごろから——その事で——狂氣になつたんです
つて。」

「あの、綺麗な娘が。」

「まったくねえ。」

と俯向いて、も一つ半纏の襟を合わせる。

十七

「妙齡としごろで、あの容色きりようですからね、もう前ぜんにから、いろいろ縁談もあつたそうですけれど、お極きまりの長し短しでいた処、お稲ちゃんいなちゃんが二三年前まで上つていなすつた……でも年二季の大温習おおぐらいには高台へ出たんだそうです……長唄のお師匠さんの橋渡しで。

家は千駄木辺で、お父さんは陸軍の大佐だか少将だか、それで非職ひいてるの。その息子さんが新しい法学士なんですつて……そこからね、是非、お嫁さんよめに欲ほしいて言つたんですとさ。

途中で、時々顔を見合つて、もう見合いなんか済んでるの。男の方は大変な惚ほれ方かただよ。もつとも家同士、知合いというんでも何でもないんですから、口を利いたことなんて、そりやなかつたんでしようけれど、ほんに思えば思われるとやらだわね。」

半纏着の蘭菊は、指のさきで、火鉢の縁ふちへちよいと当つて、

「お稲ちゃんの方でも、嬉しくない事はなかつたんでしょう。……でね、内々その氣だつたんだつて、……お師匠さんは云うんですとさ、——隣家となりの女房かみさんの、これは談話はなしよ。」

まだ卒業前ですから、お取極とりきめは、いずれ学校が済んでからツて事で、のびのびになつ

ていたんだそうですがね。

去年の春、お茶の水の試験が済むと、さあ、その翌日^{あくるひ}にでも結納を取替^{いきか}わせる勢^{いきおい}で、男の方から急^{せきこ}込んで来たんでしよう。

けれども、こつちぢや煮切^{にえき}らない、というのがね——あの、娘^こにはお母^{つか}さんがありません。お父さんというのは病身で、滅多に戸外^{そと}へも出なさない、何でも中気か何からしいんです——後家^{ごけ}さんで、その妹さん、お稲^{いな}ちゃんには叔母に当る、お婆さんのハイカラが取締^{とせり}つて、あの娘^この兄さん夫婦が、すっかり内の事を遣^やっているんだわね。

その兄さんというのが、何とか云う、朝鮮にも、満洲とか、台湾にも出店のある、大^{おおき}な株式会社^{かぶしがいしゃ}に、才子で勤めているんです。

その何ですとき、会社の重役の放蕩息子^{どらむすこ}が、ダイヤの指輪で、春の歌留多^{かるた}に、ニチャリと、お稲^{いな}ちゃんの手を圧^{おさ}えて、お可厭^{いや}だ。」

と払う真似して、

「それで、落第、もう沢山。」

「どうか。」

「ほんとうですとも。それからそのニチャリが、」

「右のな、」

と春狐は、ああと歎息する。

「ええ、ぞつこんとなつて、お稲ちゃんをたつてと云うの、これには嫂あによめが一はながけに乗つたでしょう。」

「極きまりでいやあがる。」

「大分、お芝居になつて来たわね。」

「余計な事を言わないで……それから、」

「兄さんの才子も、やつぱりその氣だもんですからね、いよいよという談話はなしの時、きつぱり兄さんから断つてしまつたんですつて——無い御縁とおあきらめ下さい、か何かでさ。」

「その法学士の方をだな、——無い御縁が凄すさまじいや、てめえが勝手に人の縁を、頤あごにしやぼん玉の泡沫あぶくを塗つて、鼻の下を伸ばしながら横撫でに粧めけやあがる西洋剃刀かみそりで切つたんじゃないか。」

「ねえ……鬱ふさいでいましたとき、お稲ちゃんは、初心うぶだし、世間見ずだから、口へ出しては何にも言わなかつたそうだけれど……段々、御飯が少なくなつてね、好すきなものもちつとも食べない。」

その癖、身じまいをする事したら、髪も朝に夕に撫でつけて、鬢びんの毛一筋こぼしていた事はない。肌着も毎日のように取替えて、欠かさずに湯に入つて、綺麗にお化粧をして、寝る時はきつと寝白粧ねおしろいをしたんですつて。

皓齒しらはに紅べによ、凄すじいようなじゃない事、夜が更けた、色艶いろつやは。

そして二三度見つかりましたとき。起返つて、帯をお太鼓にきちんと〆《し》めるのを——お稲や、何をおしだつて、叔母さんが咎とがめた時、——私はお母つかさんの許とこへ行くの——そう云つてね、枕まくらもと許もとへちゃんと坐つて、ぱつちり目を開けて天井を見ているから、起きてるのかと思うと、現うつで正体がないんですとき。

思おも詰いめたものだわねえ。」

十八

「まだね。危あやいつてないの。聞いても、ひやひやするのはね、夜中に密そつと箆たんすの抽斗ひきだしを開けたんですよ。」

「法学士の見合いの写真？……」

「いいえ、そんなら可いけれど、短刀を密と持ったの、お母さんの守護刀だそうですよ……そんな身だしなみのあつたお母さんの娘なんだから、お稲ちゃんの、あの、きりりとして……妙齡で可愛い中にも品の可かつた事を御覧なさい。」

「余り言うのはよせ、何だか気を受けて、それ、床の間の花が、」

「あれ、」

と見向く、と朱鷺色に白の透しの乙女椿がほつりと一輪。

熟と視たが、狭い座敷で袖が届く、女房は、くの字に身を開いて、色のうつるよう掌に据えて俯向いた。

隙間もる冷い風。

「ああ、四辻がざわざわする、お葬式が行くんですよ。」

と前掛の片膝、障子へ片手。

「二階の欄干から見る奴があるものか。見送るなら門へお出な。」

「止ましよう、おもいの種だから……」

と胸を抱いて、

「この一輪は蔭ながら、お手向けになったわね。」と、鼻紙へ密と置くと、冷い風に淡い

紅……女心はかくやらむ。

窓の障子に薄日が映した。

「じゃ死のうという短刀で怪我でもして、病院へ入ったのかい。」

「いいえ、それはもう、家中で要害が嚴重よ。寝る時分には、切れものという切れものは、そつくり一つ所へ蔵^{しま}つて、錠^{じょう}をおろして、兄さんがその鍵^{かぎ}を握^{にぎ}つて寝^ねたんだっていうんですもの。」

「ははあ、重役^{せうやく}の忤^{せがれ}に奉^{ほう}つて、手繰^てりつく出世^{しゅっせ}の蔓^{つる}、お大事なもんですからな。……会社でも鍵を預^{あづか}る男だろう。あの娘の兄と云えば、まだ若^{わか}かろうに何の真似^{まね}だい。」

「お稻ちゃん、またそんなでいて、しくしく泣き暮^くらしてでも、お在^いだったかと思うと、そうじやないの……精々^{せいせい}裁縫^{さいほう}をするんですつて。自分のものは、肌^いのものから、足袋^{たび}まで、綺麗^{きれい}に片づけて、火熨^{ひのし}斗^とを掛けて、ちゃんと蔵^{しま}つて、それなり手を通さないでも、もの十日も経^たつと、また出して見て洗い直すまでにして、頼^{たの}まれたものは、兄^{あか}さんの嬰^{かん}児^ごのおしめさえ折りめの着^きくほど洗濯^{せんたく}してき。」

「おやおや、兄^{あか}の嬰^{かん}児^ごの洗濯^{せんたく}かね。」

「嫂^{あによめ}というのが、ぞろりとして何にもしやしませんやね。またちよつとふめるんだわ。そ

りやお稲ちゃんの傍へは寄附けもしませんけれども。それでもね、妹が美しいから負けな
 いようにって、——どういう了簡ですかね、兄さんが容色望みで娶ったっていうん
 ですから……

小児は二人あるし、家は大勢だし、小体に暮っていて、別に女中つても居ないんですも
 の、お守りから何から、皆、お稲ちゃんがしたんだわ。」

「ははあ、その児だ……」

ともすると、——それが夕暮が多かった——嬰兒を背負って、別にあやすでもなく、
 結いたての島田で、夕化粧したのが、顔をまつすぐに、清い目を睜って、蝙蝠も柳も無
 しに、何を見るときもなく、熟と暮れかかる向側の屋根を視めて、其家の門口にイん
 だ姿を、松崎は両三度、通りがかりに見た事がある。

面影は、その時の見覚えで。

出窓の硝子越しに、娘の方が往かえりの節などは、一体傍目も触らないで、竹をこぼる
 る露のごとく、すいすいと歩行く振、打水にも棲のなずまぬ、はで姿、と思えばかりで、
 それはよくは目に留まらなかった。

が、思い当る……葬式の出たあとでも、お稲はその身の亡骸の、白い柩で行く状を、

あの、門かどに一人立つて、さも恍惚うつとりと見送っているらしかった。

十九

女房は語かたり続けた――

「お稲ちゃんあしなが、そんなに美しく身のまわりの始末をしたのも、あとで人に見られて恥かしくないように躰たしなんでいたんだわね――そして隙さえあれば、直ぐに死ぬ気で居たんでしよう、寝しなにお化粧をするのなんか。

ですから、病院へ入ったあとで、針箱ひきだしの抽斗ひきだしにも、畳紙たたがみの中にも、皺しわになった千代紙一枚もなく……油染あぶらじみた手柄ひとかけ一掛ひとかけもなかったんですって。綺麗きれいにしておいたんだわ……友達から来た手紙なんか、中には焼いたのもあるんですって、……心掛けたじゃありませんか。惜おしまれる娘こは違うわね。

ぐつと取詰とりつめて、気が違った日は、晩方、髪結かみゆいさんが来て、鏡台に向つていた時ですって。夏の事でね、庭に紫陽花あじさいが咲いていたせいか、知らないけれど、その姿見あおの蒼さあおたら、月もささなかつたって云うんですがね。――そして、お稲ちゃんのその時の顔ぐら

い、色の白いつて事は覚えないうんですとき――

髪結さんが、隣家となりの女房かみさんへ談話はなしなんです。

同一おなじのが廻りますからね。

隣家となりと、お稲ちゃん許とこと、同一おなじのは、そりや可いいけれど、まあ、飛んでもない事……その

の法学士さんの家うちが、一つ髪結さんだつたんでしよう。だもんだから、つい、その頃、法学士さんに、余所よそからお嫁さんが来て、……箱根へ新婚旅行をして帰つた日に頼まれて行つて、初結いをしたつて事を……可よござんすか……お稲ちゃんの島田を結いながら、髪結さんが話したんです。」

「ああ、悪い。」

と春狐は聞きながら、眉ひそを顰ひそめた。

同じように、打顰うちひそんで、蘭菊は、つげの櫛びんで鬢びんの毛を、ぐいと撫なでた。

「……気を附けないと……何でも髪結さんが、得意先の女の髪を一条ひとすじずつ取つて来て、内証ないしよで人のと人のと結び合わせて蔵しまつておいて御覧なさい。

世間は直ぐに戦争いくさよりは余計乱れると、私、思うんですよ。

お稲さんは黙つて俯向うつむいていたんですつて。左挿ひらうちしに、毛筋を通して銀の平打ひらうちを挿込

んだ時、先が突刺りやしないかと思った。はつと髪結さんが拔戻した発奮で、飛石へ力
チリと落ちました。……

——口惜しい——とお稲ちゃんが言っただけです。根揃え自慢で緊めたばかりの元
結が、プツリ切れ、背中へ音がして颯と乱れたから、髪結さんは尻餅をつきましたと
さ。

でも、髪結さんは、あの娘の髪の事ばかり言っただけで惜がつてるそうですよ。あんな、美
い、柔軟な、艶の可い髪は見た事がないってね、——死骸を病院から引取る時も、こう
横に抱いて、看護婦が二人で担架へ移そうとすると、背中から、ズツとかかって、裾より
か長うござんしたって……ほんとうに丈にも余るというんだわね。」

「ああ……聞いても惜い……何のために、髪までそんなに美しく世の中へ生れて来たんだ
。」

春狐は思わず、詰るがごとく急込んで火鉢を敲いた。

「ねえ、私にだって分りませんわ。」

「で、どうしたんだい。」

「お稲ちゃんは、髪を結った、その時きり、夢中なの。別に駈出すの、手が掛るのって事

はなかつたんだそうですけど、たださえ細った食が、もうまるつきり通りますまい。

賺^{すか}しても、叱^{しか}つても。

しようがないから、病院へ入れたんです。お医者さんも初^{はじめ}から首をお傾^まげだつたそうですよ。

まあね。それでも出来るだけ手当をしたにはしたそうだけれど、やつぱり、……ねえ……おとむらいになつてしまつて——」

と薄^{うす}りした目のうちが、颯^{さつ}とさめると、ほろりとする。

二十

春狐は肩^{そびや}を聳^こかした。

「なつたんじやない……葬^{ともらい}式にされたんだ。殺されたんだよ。だから言わない事じやない、言語道断だ、不埒^{ふちち}だよ。妹^{えさ}を餌^{えさ}に、鰯^{としよう}が滝登りをしようなんて。」

「ええ、そうよ……ですからね、兄つて人もお稲ちゃん^{あかんぼ}が病院へ入つて、もう不可^{いけ}ないつという時分から、酷^{ひど}く何かを気にしてさ。嬰^{あかんぼ}児^ごが先に死ぬし、それに、この葬^{ともらい}式の中だ、

というのに、あによめ 嫂だわね、御自慢の細君が、またどつと病気で寝ているもんだから、ああ稲がとりに来たとりに来たつて、蔭ではそう云つていますとさ。」

「待つていた、そうだろう。その何だ、ハイカラな叔母なんぞを血祭りに、家中みなごうし 麁殺に願いたい。ついでにお父さんの中気だけ治してな。」と妙に笑った。

「まあ、」

と目をみは睜つて、

「串じようだん 戯じゃないわ、人の気も知らないで。」

「無論、串戯ではないがね、女言みだ濫りに信みずべからず、半分は嘘だろう。」

「いいえ！」

「まあさ、お前の前だがね、隣の女房かみさんというのが、また、とかく大袈裟おおげさなんですからな。」

「勝手になさいよ、人に散々饒舌しゃべらしといて、嘘じゃないわ。ねえ、お稲ちゃん、女は女

同士だわね。」

と乙女椿に頬ほ摺りして、鼻紙に据よえて立つ……

実はそれさえ身に染みた。

床の間にも残つたが、と見ると、苔つぼみの堅いのと、幽かすかに開いた二輪のみ。

「ちよつと、お待ち。」

「何、^{なかに}と襖^{ふすま}に手を掛ける。

「でも、少し気になるよ、肝心、焦れ死^{こがじに}をされた、法学士の方は、別に聞いた沙汰なしかい。」

「先方^{さき}でもね、お稲ちゃんがその容体だつてのを聞いて、それはそれは気の毒がつてね——法学士さんというのが、その若い奥さんに、真になつて言つたんだつて——お前は二度目だ。後妻だと思つてくれ。お稲さんとは、確^{たしか}に結婚したつもりだつて——」

春狐はふと黙つてそれには答えず……

「ああ、その椿は、成りたけ川へ。」

「流しましょうね、ちよつと拝んで、」

と二階を下りる、……その一輪の朱鷺^{ときいろ}色さえ、消えた娘の面影に立った。

が、幻ならず、最も目に刻んで忘れないのは、あの、夕暮を、門^{かど}に立つて、恍惚^{うつとり}空を視^{なが}めた、およそ宇宙の極まる所は、艶やかに且つ黒きその一点の秘密であろうと思う、お稲の双の瞳であつた。

同じその瞳である。同じその面影である。……

——お稲です——

と云つて、振向いた時の、舞台の顔は、あまつさえ、凝なぞらえたにせよ、向つて姿見の真ま蒼あなど云う行燈あんどんがあらうではないか。

美しい女ひとは屹きと紳士を振向いた。

「貴方あなた。」

若い紳士は、杖ステッキを小脇すばしに、細い筒袴ずぼんで、伸掛のしかかつて覗のぞいて、

「稲荷だろう、おい、狐が化した所なんだろう。」と中折なかおれの廂ひさしで押おしつけるように言つた。

羽織うぎに、シヨオルを前結び。またそれが、人形に着せたように、しつくりと姿に合つて、真向まむきに直つた顔を見よ。

「いいえ、私はお稲です。」

紳士は、射られたように、縁台さかへ退さがつた。

美しい女の棲つまは、真菰まこもがくれの花菖蒲はなあやめ、で、すらりと筵むしろの端かかに掛かつた……

「ああ、お稲さん。」

と、あたかもその人のように呼びかけて、

「そう。そして、どうするの。」

お稲は黙って顔を見上げた。

小さなその姿は、ちょうど、美しい女ひとが、脱いだ羽織をしなやかに、肱ひじに掛けた位置に、
なよなよとして見える。

「止よせ！品子さん。」

「可いいわ。」

「見つともないよ。」

「私は構わないの。」

二十一

「ねえ、お稲さん、どうするの。」

とまた優しく聞いた。

「どうするって、何、小母さん。」

役者は、ために羽織を脱いだ御ご鼻び肩いに対して、舞台ながらもおとなしい。

「あのね、この芝居はどういう脚色しやくみなの、それが聞きたいの。」

「小母さん見ていらつしやい。」

と云った。

その間も、縁台に掛けたり、立ったり、若い紳士は気が気ではなさそうであつた。

「おい、もう帰ろうよ、暗くなつた。」

雲にも、人にも、松崎は胸が轟く。

「待つて下さい。」

と見返りもしないで、

「見ますよ、見るけれどもね、ちよつと聞かして下さいな。ね、いい児だから。」

「だって、言つたつて、芝居だつて、同一なんでもの、見ていらつしやい。」

「急ぐから、先へ聞きたいの、ええ、不可い。」

お稲は黙つて頭を掉る。

「まあ、強情だわねえ。」

「強情ではござりませぬ。」

と思いがけず幕の中から、皺がれた声を掛けた。美しい女は瞳を注いだ、松崎は衝と踏台を離れて立つた。——その声は見越入道が絶句した時、——紅蓮大紅蓮とつけて教えた、

目に見えぬものと同一であつた。

「役者は役をしますのじや。何も知りませぬ。貴女がお急ぎであらばの、衣裳をお返し申すが可い。」

と半ば舞台に指揮をする。

「いいえ、羽織なんか、どうでも可いの、ただ私、気になるんです。役者が知らないなら、誰でも構いません。差支えなかったら聞かして下さい。一体ここはどこなんです。」

「六道の辻の小屋がけ芝居じや。」

と幕が動くように向うで言つた。

松崎は、思わず紳士と目を見合つた。小兒なぞは眼中にない、男は二人のみだったから。美しい女は、かえつて恐れげもなくこう言つた。

「ああ、分りました、そしてお前さんは？」

「いろいろの魂を瓶に入れて持つて狂言方じや。たつて望みならば聞かせようかの。」

「ええ、どうぞ。」

と少々しわが、あわれに聞えた。

「そこへ……髪結が一人出るわいの。」

松崎は骨の硬くなるのを知ったのである。

「それが、そのお稲の髪を結うわいの。髪結の口からの、若い男と、美しい女と、祝言して仲の睦じい話をするのじや。」

その男というのはの、聞かつしやれ、お稲の恋じやわいの、命じやわいの。

もうもう今までとてもな、腹きたなの汚よい、慾よくに眼まなこの眩くらんだ、兄御のために妨げられて、双方で思い思ふた、繋がる縁が繋がれぬ、その切なさで、あわれや、かほそい、白い女が、紅ぐ蓮れん、大紅蓮、……」

ああ、可厭いやな。

「阿鼻焦熱あびしょうねつの苦惱くるしみから、手足がはり、肉みを切きりこまざいた血の池の中で、悶もだえ苦くるんで、半ば活いき、半ば死んで、生きもやらねば死にも遣やらず、死にも遣らねば生きも遣らず、呻うめき悩んでいた所じや。」

また方に一つもと、果敢はかない、細い、蓮はすの糸を頼んだ縁は、その話で、鼠きばの牙にフツツリと食切られたが、……

ドンと落ちた穴の底は、狂氣きちがいの病院入いりじや。この段替ればいの、狂乱しよさの所作じやぞや。
「」

と言う。風が添ったか、紙の幕が、煽つ——煽つ。お稲は言につれて、すべて科を思つたか、振が手にうっかり乗つて、恍惚と目を睜つた。……

二十二

「どうするの、それから。」

細い、が透る、力ある音調である。美しい女のその声に、この折から、背後のみ見返られて、雲のひだ染みに蔽いかかる、棧敷裏とも思う町を、影法師のごとくようやく人脚の繁くなるのに気を取られていた、松崎は、また目を舞台に引附けられた。

舞台を見返す瞬間、むこうから、先刻の編笠を被つた鴉のような新粉細工が、ふと身を起して、うそうそと出て来るのを認めた。且つそれが、古綿のようにむくむくと、雲の白さが一団残つて、底に幽に蒼空の見える……遙かに遠い所から、たとえば、ものの一里も離れた前途から、黒雲を背後に曳いて襲い来るごとく見て取られた。

それ、もうそこに、編笠を深く、舞台を覗く。

いつの間にか帰つて来て、三人に床几を貸した古女房も交つて立つ。

彼処に置捨てた屋台車が、主を追うて自ら軋るかと、響が地を畝つて、轟々と雷の音。絵の藤も風に颯と黒い。その幕の彼方から、紅蓮、大紅蓮のその声、舌も赤う、ひらめくと覺えて、めらめらと饒舌る。……

「まだ後が聞きとうござりますか。お稲は狂死に死ぬるのじや。や、じやが、家眷親属の余所で見る眼には、鼻筋の透つた、柳の眉毛、目を糸のように、睫毛を黒う塞いで、の、長煩らいの死ぬ身には塵も据らず、色が抜けるほど白いばかり。さまで痩せもせず、苦患も無しに、家眷息絶ゆるとは見たれども、の、心の裡の苦痛はよな、人の知らぬ苦痛はよな。その段を芝居で見せるのじや。」

「そして、後は、」

と美しい女は、白い両手で、確と紫の襟を压えた。

「死骸になつての、空蟬の藻脱けた膚は、人間の手を離れて牛頭馬頭の腕に上下から掴まれる。や、そこを見せたい。その娘の仮髪ぢや、お稲の髪には念を入れた。……島田が乱れて、糸も切もかからぬ膚を黒く輝く、吾が天女の後光のように包むを見さい。末は踵に余つて曳くぞの。」

鼓草の花の散るように、娘の身体は幻に消えても、その黒髪は、金輪、奈落、長く

深く残つて朽ちぬ。百年、千歳、失せず、枯れず、次第に伸びて艶を増す。その髪千筋一筋ずつ、獣が食えば野の草から、鳥が啄めば峰の花から、同じお稲の、同じ姿容となつて、一人ずつ世に生れて、また同一年、同一月日に、親兄弟、家眷親属、己が身勝手な利慾のために、恋をせかれ、情を破られ、縁を断られて、同一思いで、狂死するわいの。あの、厄年の十九を見され、五人、三人一時に亡せるじやろうがの。死ねば思いが黒髪に残つてその一筋がまた同じ女と生れる、生きかわるわいの。死にかわるわいの。

その誰もが皆揃うて、親兄弟を恨む、家眷親属を恨む、人を恨む、世を恨む、人間五常の道乱れて、黒白も分かず、日を蔽い、月を塗る……魔道の呪詛じや、何と！ 魔の呪詛を見せますのじや、そこをよう見さつしやるが可い。

お稲の髪の毛の、乱れて摩く処をのう。」

「死んだお稲さんの髪が乱れて……」

と美しい女は、衝と鬢に手を遣つたが、ほつれ毛よりも指が揺いで、

「そして、それからえ？」

と屹と言う

「此方、親があらば叱らさりよう。よう、それからと聞きたがるの、根問いをするのは、

愛嬌あいきようが無うてようないぞ。女子おなごは分けて、うら問はとい葉間はじをせぬものじゃ。」

雲の暗さが増すと、あたりに黒く艶さが映す。

その中に、美しい女ひとは、声も白いまで際立つて、

「いいえ、聞きたい。」

二十三

「たつて聞きたくばの、こうさしやれ。」

幕の蔭で、間まを置いて、落着いて、

「お稲の芝居は死骸の黒髪ぞいの長いまでじゃ。ここでは知らぬによつて、後は去いんで、二度添ぞいどのに聞かつしやれ、二度添おなごいの女子おなごに聞かつしやれ。」

「二度添とは？ 何です、二度添とは。」

扱帯しじぎを手繰るように繰返して問返した。

「か、知らぬか、のう。二度添とはの、二度目の妻の事じゃ。男に取替えられた玩弄おもちゃの女子おなごじゃ。古い手に摘まれた、新しい花の事いの。後妻うわなりじゃ、後妻ごさいと申しますものじゃ

わいのう。」

ト一度引ひかかったように見えたが、ちらりと筵むしろの端を、雲の影に踏んで、美しい女ひとの雪なす足袋は、友染すじ淒く舞台に乗った。

目を明あきらかに凝じつと視みて、

「その後妻とは、二度添とは誰れ、そこに居る人。」と肩を斜め、手を、錆さびたが楯たてのごとく、行燈あんどんに確しかと置く。

「おおおお、誰や知らぬ、その二度添というのはの、……お稲のぞみが望のぞみ遂げなんだ、縁の切れた男に、後で枕添まくらぞえとなつた女子おなこの事いの。……娑婆しゃばはめでたや、虫の可いい、その男はの、我が手で水を向けて、娘の心を誘うておいて、弓でも矢でも貫こう心はなく、先方さきの兄者に、ただ断り言われただけで指を銜くわえて退すつたいの、その上にの。

我勝手われがつてや。娘わがこがれ死しをしたと聞けば、おのれが顔をかがみで見えるまで、自惚うぬぼれての。何と、早や懷ふところ中に抱いた気で、お稲はその身の前妻じゃ。――

との、まだお稲が死なぬ前に、ちやツと祝言した花嫁御寮に向うての、――お主ぬしは後妻じゃ、二度目ぢやと思つておくれい、――との。何と虫よが可よからうが。その芋虫にまた早うてなしべなも嘗なめられる、二度添どのもあるわいの。」

と言うかと思う、声の下で、

「ほほほほ」

と口紅がこぼれたように、散つて舞うよと花やかに笑った。

ああ、膚^{はだ}が透く、心が映る、美しい女^{ひと}の身の震う影^{くま}が隈なく衣^{きぬ}の柳条^{しま}に搦^{から}んで揺れた。

「帰ろう、品子、何をしとる。」

紳士はずかずかと寄つて、

「詰^{つま}らん、さあ、帰るんです、帰るんだ。」

とせり着くように云つたが、身動きもしないのを見て、堪^{たま}りかねた体^{てい}で、ぐいと美しい女^{ひと}の肩を取った。

「帰らんですか、おい、帰らんのか。」

その手は衝^つと袖で払われた。

「貴方^{あなた}は何です。女の身体^{からだ}に、勝手に手を触つて可いんですか。他人の癖に、……」

「何だ、他人とは。」

憤^{むき}気になると、……

「舞台へ、靴で、誰、お前は。」

先刻から、ただ柳が枝垂れたように行燈に凭れていた、黒紋着のその雪女が、りんと
なつて、両手で紳士の胸を圧した。

トはつとした体で、よろよろと退つたが、腰も据らず、ひよろついて来て縋るように寄
つたと思うと、松崎は、不意にギクと手首を持たれた。

「貴方を、伴侶、伴侶と思います。あ、あ、あの、楽屋の中が、探険、……」

紳士は探険と言つた。

「た、た、探険したい。手を貸して下さい。御、御助力が願いたい。」

「それはよくない。不可ません。見物は、みだりに芝居の楽屋へ入るものではないんです
。」

「そ、そんなら、妻を——人の見る前、夫が力づくでは見つともない。貴方、連出して下
さい、引張出して下さい、願います。僕を、他人だなんて僕を、……妻は発狂しました
。」

「いいえ、御心配には及びません。」

松崎は先んじられた……そして美しい女は、淵の測り知るべからざる水底の深き瞳を、鋭く紳士の面に流して

「私は確です。発狂するなら貴方がなさい、御令妹のお稲さんのために。」
と、爽かに言つた。

「私とは、他人なんです。」

「他人、何だ、何だ。」
と喘ぐ、

「ですが、私に考えがあつて、ちよつと知己になつていたばかりなんです。」

美しい女は、そんなものは、と打棄る風情で、屹とまた幕に向つて立直つた。

「そこに居る人……お前さんは不思議に、よく何か知つておいでだね、地獄、魔界の事まで御存じだね。豪いのね。でも悪魔、変化ばかりではない、人間にも神通があります。私が問うたら、お前さんは、去つて聞けと言いましたね。」

私は即座に、その二度添、そのうわなり、その後妻に、今ここで聞きました。……
お稲さんが亡くなつてから、あとのその後妻の芝居を、お前さんに聞かせましようか。

聞かせましようか。それともお前さんは御存じかい。」

幕の内で、

「朧おぼろげ氣じや、冥土めいどの霧で朧氣じや。はつきりした事を聞きたいのう。」

「ええ、聞かしてあげましよう。——男に取替えられた玩弄おもちゃは、古い手に摘まれた新しい花は、はじめは何にも知らなかつたんです。清い、美しい、朝露に、旭あさひに向つて咲いたのだと人なみに思っていました。ですが、蝶が来て、一所に遊ぶ間もなかつたんです。

お稲さんの事を聞かされました。玩弄おもちゃは取替えられたんです、花は古い手に摘つまれたんです……男は、潔い白い花を、後妻になれと言いました。

贅ぜいたく沢です、生意氣です、行過ぎています。思つた恋をし遂げないで、引込んだら断念めれば可いい、そのために恋人が、そうまでにして生命いのちを棄てたと思つたら、自分も死ぬ可いいんです。死なねなければ、死んだ氣になつて、お念仏を唱えていれば可いいんです。

力が、男に足りないで、殺させた女を前妻だ、と一人極ぎめにして、その上に、新妻にいづまを後妻になれ、後妻にする、後妻の氣でおれ、といけ洒垂しやあしやあ々々として、髪を光らしながら、鰐髭どじょうひげの生えた口で言うのは何事でしょうね。」

「いよいよ発狂だ、人の前で見つともない。」

紳士は肩で息をした、その手は松崎に縋^{すが}っている。……

「ええ、人の前で、見つともないと云つて、ここには幾^{いくたり}多居ます。指を折つて数えるほどもない。夫が私を後妻にしたのは、大勢の前、世間の前、何千人、何万人の前だか知れません。

夫も夫、お稲さんの恋を破つた。そこにおいで他の他人も他人、皆^{みんな}、女の仇^{かたき}です。

幕の中の人、お聞きなさい。

二度添にされた後妻はね……それから夫の言^{ことば}に、わざと喜んで従いました。

涙を流して同情して、いつそ、後妻と云うんなら、お稲さんの妹分になつて、お稲さんにあやかりましょう。そのうまれ代わりになりましょう、と云つて、表向きつてを求めて、お稲さんの実家に行つて、そして私を——その後妻を——兄さんの妹分にして下さい、と言つたんです。

そこに居る他人は、涙を流して喜びました。もつとも、そこに居るようなハイカラさんは、少^わい女が、兄さん、とさえ云つてやれば、何でも彼^かでも涙を流すに極^{きま}っています。

私は精^{せい}々^せと出入^{でい}りしました。先方^{さき}からも毎日のように来るんです。そして兄さん、兄さんと、云ううちには、きつと袖を引くに極^{きま}っているんです。しかも奥さんは永々の病氣の

処、私はそれが望みでした。」
 電いなびかりが、南辻橋、北の辻橋、菊川橋、撞しゅもく木橋、川を射て、橋に輝くか、と衝つと町を徹とおつた。

二十五

「その望みかなが叶かなったんです。

そして、今日も、夫婦のような顔をして、二人づれで、お稲さんの墓参りに来たんです——夫は、私がこうするのを、お稲さんの靈たましい魂いが乗りうつったんだと云って、無性に喜んでるんです。

殺した妹の墓の土もまだ乾かないのに、私と一所に、墓参りをして、御覧なさい、裁下たちおろしの洋服の襟に、乙女椿の花を挿して、お稲は、こういう娘だったと、平気で言います。その気ですからね。」

紳士の身体からだは靴を刻んで、揺上ゆりあがるようだったが、ト松崎が留めたにもかかわらず、かつと握拳にぎりこぶしで耳を圧おさえて、横なぐれに倒れそうになって、たちまち射るがごとく町を飛

んだ。その状は、人の見る目に可笑くあるまい、礫のごとき大粒の雨。
雨の音で、寂寞する、と雲にむせるように息が詰った。

「幕の内の人、」

美しい女は、吐息して、更めて呼掛けて、

「お前さんが言った、その二度添いの談話は分ったんですか。」

「それから、」

と雨に濡れたような声で言う。

「これが知れたら、男二人はどうなります。その親兄弟は？ その家族はどうなると思います。それが幕なのです。」

「さて、その後はどうなるのじゃ。」

「あら、……」

もどかしや。

「お前さんも、根問をするのね。それで可いではありませんか。」

「いや、可うないわいの、まだ肝心な事が残ったぞ。」

「肝心な事って何です。」

「はて、此方こなたも、」

雨に、つと口を寄せた氣勢けはいで、

「知れた事じゃ……肝心のその二度添ぞいどのはどうなるいの。」

聞くにも堪えじ、と美しい女の眦ひとまじりが上った。

「ええ、廻りくどい！ 私ですよ。」

と激した状さまで、衝つと行燈あんどんを離れて、横ざまに幕の出入口に寄った。流るるような舞台の姿は、斜めに電いなびかり光さつに颯さつと送られた。……

「分っているがの。」

と鷹揚おうように言つて、

「さてじゃ、此方こなたの身は果はてはどうなるのじゃ。」

「……………」

ふと黙つて、美しい女ひとは、行燈に、しょんぼりと残ったお稲の姿にその眦まなじりを返しながら、

「お前さんの方の芝居は？ この女はどうなる幕です。」

「おいの、……や、紛れて声を掛けなんだじゃで、お稲は殊勝けなげ気に舞台じゃった。——雨に濡りように……折角の御見物じゃ、幕切れだけ、ものを見しような。」

と言うかと思うと、唐突にどろどろと太鼓が鳴った。音を絢交ぜに波打つ雷鳴る。

猫が一足と鼈が出た。

ト無慙や、行燈の前に、仰向けに、一個が頭を、一個が白脛を取って、宙に釣ると、縮ねの緩んだ扱帯が抜けて、紅裏が肩を這った……雪女は細りとあからさまになったと思うと、すらりと落した、肩なぞえの手を枕に、がっくりと頸が下って、目を眠った。その面影に颯と影、黒髪が丈に乱れて、舞台より長く敷いたのを、兇悪異変な面二つ、ただ面のごとく行燈より高い所を、ずるずると引いて、美しい女の前を通る。

幕に、それが消える時、風が擲つがごとく、虚空から、——雨交りに、電光の青き中を、朱鷺色が八重に縫う乙女椿の花一輪。はたと幕に当って崩れもせず……お稲の玉なす胸に留まつて、たちまち隠れた。

美しい女は筵に爪立って身悶えしつつ、

「お稲さんは、お稲さんは、これからどうなるんです、どうなるんです。」

「むむ、くどいの、あとは魔界のものじゃ。雪女となつての、三つ目入道、大入道の、酌など伽なとしようぞいの。わはは、」
と笑った。

美しい女は、額を当てて、幕を掴んで、

「生意気な事をお言いでない。幕の中の人、悪魔、私も女だよ、十九だよ……お稲さんと同じ死骸になるんだけど、誰が、誰が、酌なんか、……可哀相にお稲さんを——女はね、女はね、そんな弱いものじゃない。私を御覧。」

はたた、はたた神。

南無三寶、電光に幕あるのみ。

「あれえ。」と聞えた。

瞬間、松崎は猶予^{ためら}つたが、棄ておかれぬのは、続いて、編笠した鳥と古女房が、衝と幕を揚げて追込んだ事である。

手を掛けると、触るものなく、篠^{しの}つく雨の簾^{すだれ}が落ちた。

と見ると、声のしたものは何も見えない。三つ目入道、狐、狸、猫も鼬もごちやごちやと小さく固まっていたが、松崎の殺進に、気を打たれたか、ばらばらと、奥へ遁^にげる。と果^{はて}しもなく野原のごとく広い中に、塚を崩した空洞^{うつろ}と思う、穴がぽかぽかと大きく窪^{おおきくぼ}んで蜂の巣を拡張しような、その穴の中へ、すぽん、と一個^{ひとつ}ずつ飛込んで、ト貝^{かい}鮑^{だこ}と云うものめく……頭だけ出して、ケラケラと笑って失^うせた。

何等の魔性ぞ。這奴等が群り居た、土間の雨に、引撈られた衣の綾を、驚破や、蹂躪られた美しい女かと見ると、帯ばかり、扱帯ばかり、花片ばかり、葉ばかりぞ乱れたる。

途端に海のような、真昼を見た。

広場は荒廃して日久しき染物屋らしい。縦横に並んだのは、いずれも絵の具の大瓶である。

あわれ、その、せめて紫の瓶なれかし。鉄のひびわれたごとき、遠くの壁際の瓶の穴に、美しい女の姿があった。頭を編笠が抱えた、手も胸も、面影も、しろしろと、あの、舞台のお稲そのままに見えたが、ただ既に空洞へ入って、底から足を曳くものがあるう、美しい女は、半身を上に向けて、腰のあたりは隠れたのである。

雪のような胸には、同じ朱鷺色の椿がある。

叫んで、走りかかると、瓶の区劃に躓いて倒れた手に、はっと留南奇して、ひやひやと、氷のごとく触ったのは、まさしく面影を、垂れた腕にのせながら土間を敷いて、長くそこまで摩くのを認めた、美しい女の黒髪の末なのであった。

この黒髪は二筋三筋指にかかつて手に残った。

海に沈んだか、と目に何も見えぬ。

四ツの壁は、流るる電と輝く雨である。とどろとどろと鳴るかみは、大灘の波の唸りである。

「おでんや——おでん。」

戸外を行く、しかも女の声。

我に返つて、這うように、空屋の木戸を出ると、雨上りの星が晃々。

後で伝え聞くと、同一時、同一所から、その法学士の新夫人の、行方の知れなくなつたのは事実とか。……松崎は実は、うら少い娘の余り果敢なさに、亀井戸詣の帰途、その界限に、名譽の巫子を尋ねて、そのくちよせを聞いたのであつた……靈の來つた状は秘密だから言うまい。魂の上る時、巫子は、空を探つて、何も無い所から、弦にかかつた三筋ばかりの、長い黒髪を、お稲の記念ぞとて授けたのを、とやせんとばかりで迷の巷。黒髪は消えなかつた。

大正二（一九一三）年五月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成6」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年3月21日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第十五卷」岩波書店

1940（昭和15）年9月20日発行

※誤植箇所の確認には底本の親本を用いました。

入力：門田裕志

校正：高柳典子

2007年2月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

陽炎座

泉鏡花

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>